

第3章 わかやまの自然と生活



紀ノ川の平野



関連地域の位置

紀ノ川の地形と用水

紀ノ川は、奈良県の^{おおだい が ほん}大台ヶ原を源として、およそ136kmを流れ紀伊水道にそそぎ、奈良県内では^{よしの}吉野川とよばれています。

紀ノ川は漁業や水運のほか^{かんがい}灌漑用水などに利用されてきました。江戸時代には、和歌山から上流の橋本へ川上船といわれる川船が行き来しました。また吉野や高野の木材は^{いかだ}筏に組まれて紀ノ川の河口まで運ばれました。

紀ノ川北岸の橋本市から紀の川市の東部あたりまで、^{かいたんじょう}階段状の河岸段丘という地形が形づくられています。この段丘の田畑は昔から水不足になやまされてきました。それは、段丘へ水を引くことがむずかしかったことと、^{こうすい}年間の降水量が少ないこともその原因です。それでも、池がかり（ため池）や井がかり（用水路）という灌漑の工夫と努力によって県内では農業の



*2 桜池と用水路（紀の川市）

盛んな土地として発展してきました。

ため池は、橋本市の^{いわくら}岩倉池や^{ひき}引の池、紀の川市にある^{とくら}桜池、^{うながみ}海神池、^{かすが}春日池などの大きな池をはじめ、紀ノ川の北岸に多く分布しています。これらの池は支流の谷をせき止めてつくられています。

用水路は、江戸時代に紀州藩の命をうけた^{おおはたさいざう}大畑才蔵によって^{ふじさきい}藤崎井や^{おだ}小田井などがつくられました。藤崎井は紀の川市^{せき}藤崎の堰（標高約40m）から和歌山市^{ひょうこう}山口口までおよそ24km、小田井は橋本市^{こうやぐち}高野口町小田の堰（標高約70m）から^{いわで}岩出市根来まで約32kmを流れています。

現在、小田井よりもさらに標高の高いところに紀の川用水がひかれています。^{とつがわ}十津川・紀ノ川総合開発事



*1 紀ノ川上流の河岸段丘（橋本市高野口町）



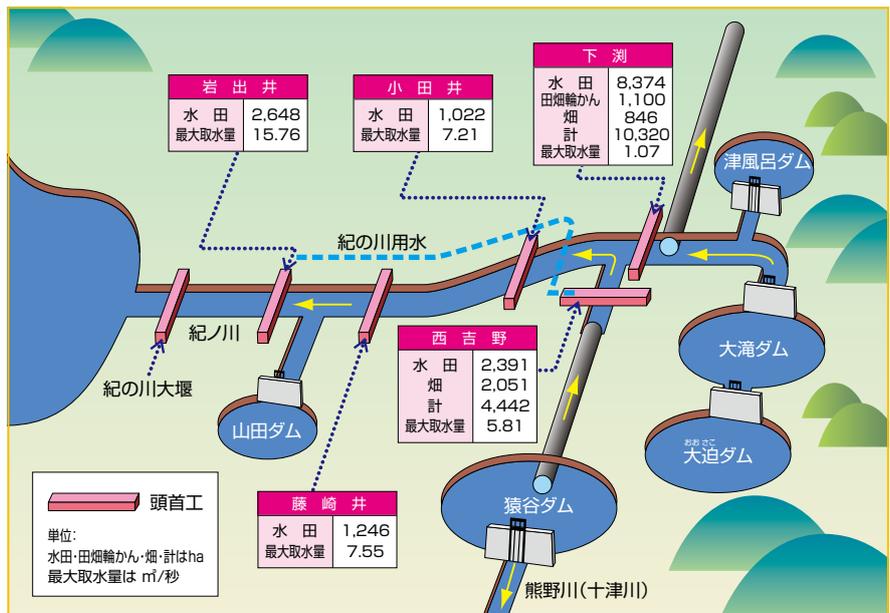
紀の川用水の水管橋（橋本市恋野）

*1 河岸段丘（写真）は、和泉山脈の手前にある緑の細長い高台が中位段丘、町屋の部分が低位段丘。
*2 2.5万分の1土地利用図「粉河」「岩出」（1979年）。
*3 第2編 第5章「熊野川と紀ノ川の水利利用」191ページ参照。

業として、太平洋へ流れ出る十津川の水を奈良県の猿谷ダムで仕切り、和歌山市までみちびいてくるもので、人の手による「第二の紀ノ川」ともいえる大がかりな用水です。こうした灌漑の発達によって、水田や果樹園などの生産は安定し、農地を有効に活用することができています。

なお、川の水を取り入れる堰やその取り入れ口などを頭首工といいます。紀ノ川につくられた近代的な頭首工としては小

田・藤崎・岩出・新六箇井がありました。しかし、新六箇井にかわって、その下流500mのところ「紀ノ川大堰」が建設されました。大堰は川の水量にあわせてゲートの高さを調節できる可動堰で、洪水などの災害を防ぎ、川の水を生活に利用することができるうえ、まわりの環境もこわさないなど、いろいろなはたらきを目的にしてつくられています。



紀ノ川流域の水利用

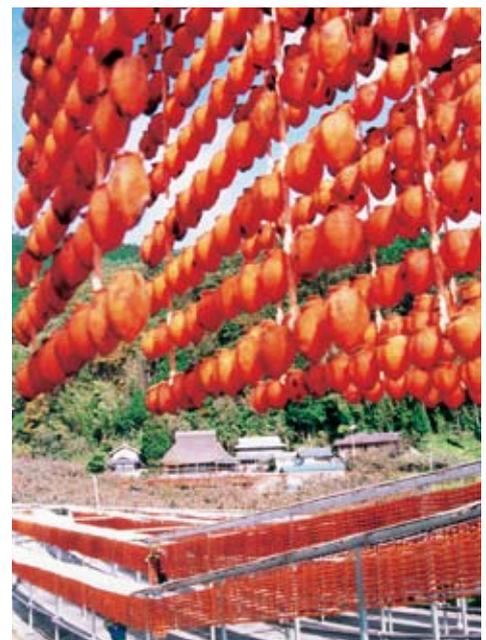
上・中流の農産物



タマネギの収穫と乾燥小屋（紀ノ川の川市）

ミカンとウメで知られる和歌山県ですが、紀ノ川の平野で主に栽培される柿やハッサクも産出額で全国1位をほこっています。

柿は、かつらぎ町・橋本市・九度山町など上流の伊都地方が主産地で、甘い富有柿や渋い平核無柿などが栽培されています。最近では品種改良や渋ぬきの方法の開発で、刀



四郷の串柿と民家（かつらぎ町）

根早生や樹の上で実の渋みをとって収穫できる紀ノ川柿の栽培が増えています。

かつらぎ町の四郷は昔から串柿の特産地として知られ、柿を乾かす柿すだれは初冬の特徴ある風景となっています。

中流の那賀地方（今の紀ノ川市・岩出市）は、かつては「和歌山の穀倉」といわれ、県内第一の米の産地でした。

現在の紀ノ川市は、ハッサク・イチヂク・イチゴ・モモなど果物の中心とした農業が盛んで、そのうち、ハッサクとイチヂクは産出額で全国第1位になっています。イチゴ・モモ・キウイフルー

*1 第2編 第5章「熊野川と紀ノ川の水利用」191ページ参照。

*2 1864（元治1）年、楠見信貴らによって土入川方面につけられた。国土交通省による紀ノ川大堰の建設で取り除かれる。

*3,4 2006（平成18）年 近畿農政局和歌山農政事務所統計。

ツ・ブドウのほか、野菜のタマネギ・ナス、草花のバラ・キクなどの栽培も盛んで、これらの農産物は紀の川市が県内第1位の産出額をほこっています。

栽培面積でみると、紀の川市桃山町にはじまったモモは県内の70%、タマネギは県内の約60%の作付けを占めています。



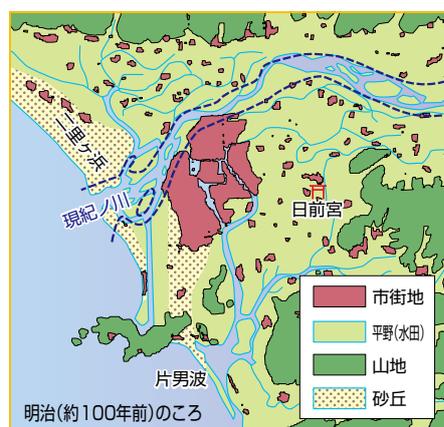
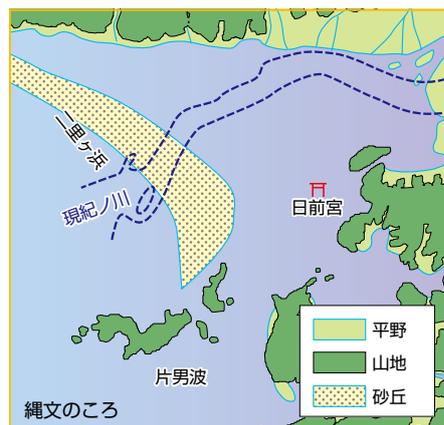
モモ畑（紀の川市桃山町）

下流の川の流れと生活

下流には和歌山平野が広がっています。今から6,000年ほど前の縄文時代には和歌山平野の大半は浅い海でしたが、古代のころになると紀ノ川の流れが大きく曲がり、和歌川を通過して和歌浦湾に流れこんでいました。中世のころには、流れを現在の水軒川に変えて大浦へそそぐようになりました。その後、津波などにより紀ノ川はほぼ現在のようなになったといわれています。

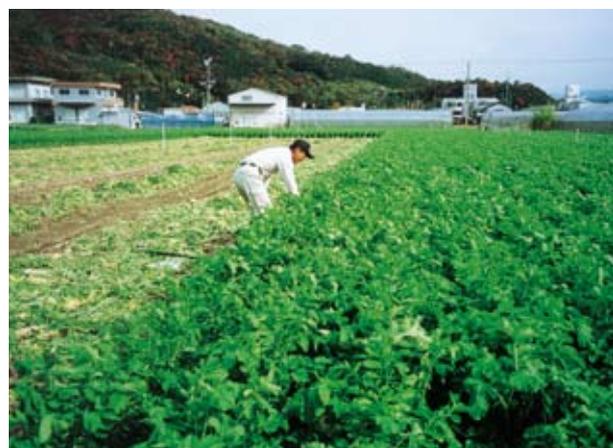
これまでの紀ノ川は、洪水によって堤防が切れて、特に下流一帯ではたびたび水害を受けましたが、現在は丈夫な堤防ができています。しかしその影響で、一部の郊外の低い田畑に浸水の被害が発生するようになり、その対策がすすめられています。

江戸時代から吉野材の集散地であった和歌山市は、1920（大正9）年ごろに製材業の中心地となり、紀ノ川の河口や和歌川沿いには製材工場ができました。昭和の初めごろは、樺太マツなどの北洋材がよく使われ、今は、米ツガなどアメリカの輸入外材にかわってきています。製材工場は住宅建築の変化によって、約25件（2005年）と減ってきていますが、新しくプレカットや集成材工場の進出がみられます。工場は紀ノ川河口の築港付近と、かつての水軒浜の木材工業団地の2か所に集中しています。



*2 紀ノ川の移り変わり

和歌山市の農業は砂地を利用する農業に特色があります。砂地に



青首大根の収穫（和歌山市布引）

適する根菜類のうち、つけ物にする「和歌山大根」は品質の良さから特産物として知られていますが、近年はあまみのある青首大根が主に栽培されています。新ショウガのハウス栽培も盛んで、京阪神など大市場へ出荷する近郊野菜や果樹園芸の割合も高くなってきています。作付面積でみると、ニンジン^{*5}は約86%、キャベツは約66%、ダイコンは約60%、ハクサイは約55%、ピーマンは約23%と、それぞれ県内トップの栽培地となっています。

*1, 5 「和歌山県の農林水産業」2008（平成20）年（和歌山県農林水産部）。

*2 和歌山市立博物館「総合案内」より。

*3 プレカットは住宅用の木材を図面どおり工場であらかじめ加工すること。集成材は木の板を接着剤でくっつけた柱や板のこと。

*4 1967（昭和42）年に、外材輸入の増加と、和歌山市内の製材工場を移すために木材港と工業団地ができた。



わかやまの知識



【アユと釣り竿】

天然アユが減り、^{ようしよく}養殖による漁業が中心になってきていますが、新しくできた紀の川大堰にも人工河川（産卵場）を建設するなど天然アユをふやす努力がされています。紀ノ川の本流では毎年5月26日が解禁日で、紀ノ川はアユ釣りの季節に入ります。紀州徳川家のおかかえ漁師であった、かつらぎ町背ノ山の小西家は、茜屋流という独特の漁法を親から子へと伝えてきました。

橋本市の特産品のヘラブナとは、ヘラブナを釣る和竿で種類の違う和竹を継いだ竿です。現在、50名ほどの竿師によって、全国の竹製ヘラブナの90%をつくっています。この竿は紀州ヘラブナと言い、和歌山県の伝統工芸品に指定されていますが、心をこめて作りあげた竿には、それぞれ竿師の作品をしめす「師光」「源竿師」というような竿銘が彫られています。できあがった竿をためす研究用の「隠谷池」という池は、釣り師と竿師の交流の場でもあり、毎年、全国ヘラブナ釣り選手権大会の決勝大会がひらかれています。



釣り竿を製作する竿師（橋本市）



わかやまの知識



【輪の中に生きる】

紀ノ川の下流、和歌山市小豆島に堤防でかこまれた「中州」といわれる輪中があります。江戸時代には8～9軒の家だけでしたが、今は21軒の農家があります。堤防がいつつくられたかわかっていませんが、1889（明治22）年の大洪水でも中州は丈夫な堤防のおかげで被害はありませんでした。有名な中部地方の濃尾平野を流れる木曾川の輪中でも、たびたびの大洪水を防ぎ輪中で生きる人々が助かっています。

小豆島の中州は、北と南が橋でむすばれています。そのなかにある農家は1mほどの石垣の上に建てられています。

中州では、夏はショウガ・ゴボウ・ニンジン、冬はダイコン・ハクサイなどの栽培が盛んです。水はけのよい砂地なので一枚一枚の畑に一つずつ灌漑用の井戸があり、中州全体で約50本ほど掘られています。



紀ノ川の中州（和歌山市）

* 1 和歌山県のあゆ漁業は日高川・有田川・紀ノ川など多くの川でおこなわれているが、養殖アユの収穫量は全国第1位（2006（平成18）年）。

第3章 わかやまの自然と生活



有田川流域のミカン栽培と生活

有田ミカン

有田川は標高1,000mほどの山岳地にある高野山から流れる河川です。有田川とその支流には、有田市と2つの町があり、農業や林業で生活している人は、県内の約15%にあたります。

和歌山県はミカンの栽培が盛んで、なかでも「有田みかん」は全国的に有名です。日本国内の18.2%を生産し、そのうち、有田地方は県内の49%を占めています。

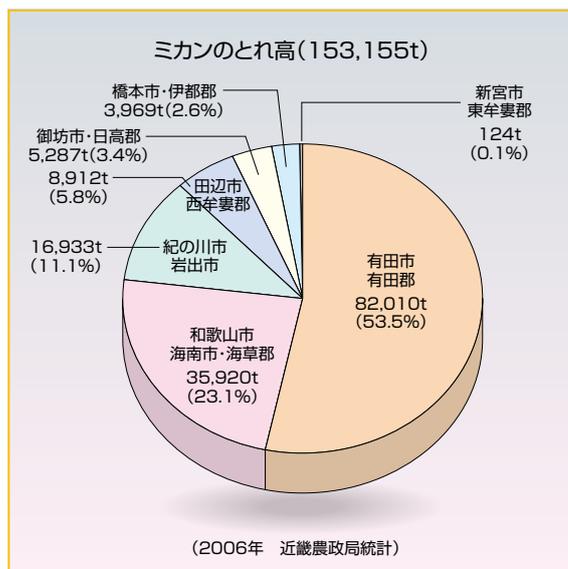
紀州のミカンは1529年にはすでに京都の貴族が土産物として持ち帰っていますが、特にこの地方で、ミカンの栽培が盛んになったのは江戸時代からです。

日当たりのよい有田地方の山の斜面はれきをふくみ、排水がよくて空気を通すのに優れているのでミカンの栽培が行われてきました。また、年間の平均気温が16℃、年間降水量も1,200mm程度で、雪が降ることもほとんどなく、ミカンの栽培には適した気候の土地です。



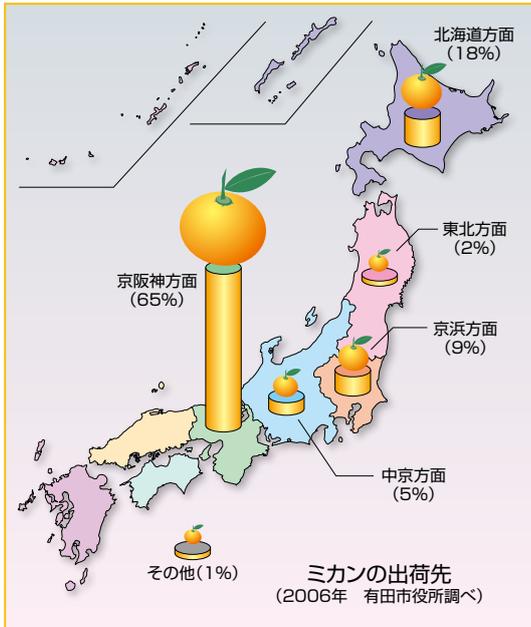
有田みかんの段々畑（有田市）

そのうえ、1953（昭和28）年の大洪水によって下流の水田が土砂にうずもれたこともあって、水田がミカン畑にかわり生産量がふえました。山腹のミカン畑に行くための農道をつくったり、夏の水やりや消毒に役立つスプリンクラーを設けるなど、農作業が楽にできるように努力しています。一方で、ほかの県と市場での競争をのりきる工夫をしています。ビニルハウスでのミカンづくりはその一つです。ハウス栽培のミカンは6月には収穫できて早い時期に出荷できるので値段もよく、高い収入をあげることもできますが、ハウスを建てたり、加温機をとりつけるなどの設備をととのえるのに多くの費用がかかっています。平均1ha以上の農家では、9月から12月にかけて早生から晩生まで、何種類かのミカンをつくり、そのあと3月までに



ミカン畑のスプリンクラー（有田市）

* 1 2006（平成18）年の全国生産量は84.2万tで、和歌山県15.3万t、愛媛県12.5万t、静岡県11.8万tである。（農林水産統計）
 * 2 第2編 第3章「紀州みかん」142ページ参照。

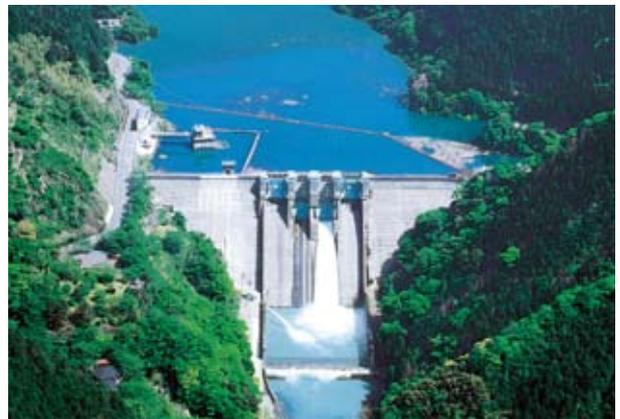


イヨカンやオレンジを栽培します。このように多くの種類のミカンを次々と収穫し、出荷しています。

収穫されたミカンの約半分は共同選果場に運ばれ、カラーセンサーを使って、一つひとつ大きさや色、きずのぐあいを調べてより分け、東京や大阪の大市場へ出荷されています。このほかに個人で出荷する農家もあります。

7・18水害と二川ダム

1953年5月の終わりから梅雨に入り雨が降りつづいたうえ、7月17日から18日の朝にかけて平地で300mm以上、上流の山間地では500mm以上の雨が降りました。強い雨が短時間のうちに降ったため山崩れがおり、その土砂は濁った水となって流れ、大量の土砂が集落を押しつぶしました。特に上流の



有田川中流の二川ダム (有田川町)

かつらぎ町大字花園地区の被害は大きく、下流の有田市では有田川の堤防が切れ大水害になりました。

この7・18水害をきっかけに有田川の総合開発計画が立てられ、1967年、洪水をなくすための県営二川ダムが有田川の中流に建設されました。

二川ダムは、梅雨や台風の際は集中豪雨で河川の水が増えないように調節し、その貯水した水を利用して水力発電もおこなっています。



わかやまの知識 コラム

蘭島の棚田

有田川の上流、有田川町清水に蘭島の棚田があります。

この棚田は江戸時代の初めごろ、大庄屋であった笠松佐太夫が米の生産を増やすために開墾した水田といわれています。この棚田には54枚もの水田があります。

水田は一枚一枚が水を保つように水平でなければならぬので、平地に恵まれない傾斜地では棚田にするのです。

この棚田は、石垣をつみあげて作った努力の跡がみられ、昔の人が残してくれた大切な文化遺産で、「日本の棚田百選」にも選ばれています。



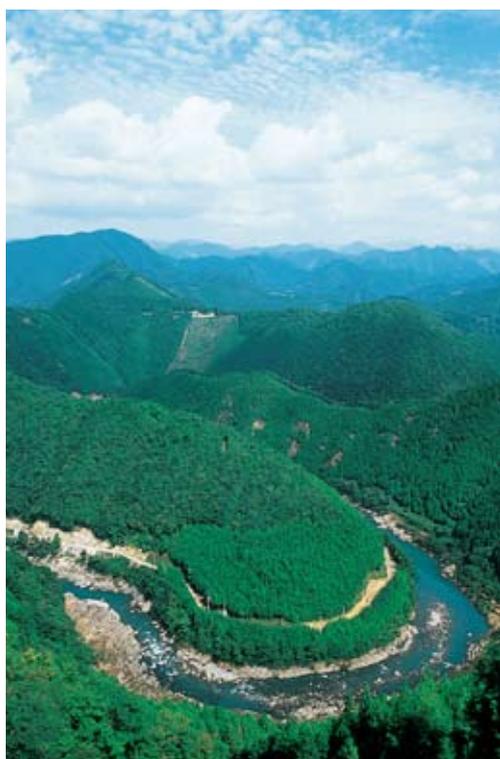
蘭島の棚田 (有田川町)

* 1 コンクリートの重力で水量をささえる重力式ダムで、堤高67m、貯水量3,010万㎡。

第3章 わかやまの自然と生活



日高川の山村



日高川中流の曲流と山並み

流域の山林と生活

日高川は、護摩壇山(1,372m)から、けわしい山々の間をほぼ西に流れ、御坊市で紀伊水道にそそいでいます。日高川の谷すじや下流の人々は、この川の豊かなめぐみをうけて生活しています。日高川は日高地方の人々にとっては「母なる川」なのです。

日高川上流の龍神(田辺市)と中流の美山・中津(日高川町)の3地区は、総面積の90%以上をけわしい山地が占める山村で、山林の大部分が民有林となっています。そして、モミ・ツガ・ケヤキなどの天然林よりも、スギ・ヒノキの人工林が多くなっています。1960(昭和35)年ごろから、経済が発展して家庭用の燃料が薪炭からガス・電気にかわり、さらに、外国から安い木材が輸入されるようになったことなどで、山の産物に対する関心もうすれてきました。3地区の第一次産業人口は1965年には全人口の60%を占めましたが、2005(平成17)年には25%しかなく、林業に従事する若者が少なくなり後継者が必要となっています。

今、この地域では、温泉の開発やスポーツ・文化施設を整えたり、シイタケ・木炭・花木栽培・木材加工などの特産品の生産に力を入れています。また、猪や鹿・猿などから農作物の被害を防ぐ対策や、都会からの農業をしたいと希望する人たちの受け入れに力を入れています。

昔の筏流しと川舟

日高川流域の木材は、古くから日高川の水の流れをたよりにして、「管流し」や「筏流し」によって河口の御坊へ集められました。管流しを日高川流域では、「かり川流し」とよび、せき止めた水を勢いよく流すときに木材を一本一本川下へ流し出す方法です。たいていは、木材は筏に組んで流しましたが、筏は5・6本の丸太をフジカズラで組み、それを15組つなぎ合わせたものです。大正時代には、2人の筏師が乗



日高川下流の御坊の木材市場(1955年ごろ)

*1 2005(平成17)年5月に川辺町・中津村・美山村が合併して日高川町が誕生した。本節では、旧村名を地区の名前として記している。
*2 日高川町の美山地区、中津地区などでは赤い実のつく千両が年末に京阪神へ出荷される。

り、滝や瀬のある難所をあやつりながら、上流の田辺市龍神地区から日高川町中津地区の船津まで2～3日、船津から御坊までは約5時間下りました。しかし、水量の少ない冬には2日ぐらいかかりました。

筏流しの中心となって活躍したのは、美山・中津地区の人たちでした。明治から大正時代には、筏流しは最も盛んになり、河口の御坊市や中津地区の船津などに、筏宿が軒をつらねてにぎわいました。熊野川や四国の吉野川、四万十川まで筏流しの出稼ぎに行く人もあり、また、明治の末ごろには鴨緑江まで出かけて行きました。

1921（大正10）年、紀南索道が開通し、木材は龍神地区から田辺まで運ばれるようになりました。その後、次第にトラックで田辺に出されるようにもなり、盛んに行われていた筏流しは、1953年の大水害のあと姿を消しました。

日高川流域の木炭・薪・シイタケなどの産物は、馬や人夫、「滝船」によって船津まで運ばれ、そこで川船に積み替えて御坊まで送られました。川船は江戸時代の中ごろからありましたが、明治時代の中ごろには、ますます盛んになりました。中流の船津には、5軒の船問屋があり、20隻の川船でにぎわいました。

川船は長さ8m、幅1.5mほどで、三反帆をはり、木炭であれば130俵も積み、二人の乗り手が4～5時間かけて御坊まで下りました。上りには食料品や日用品を積みこんで人が引っぱりました。道路改修がすすんだ大正時代の末ごろに、川船から陸路の輸送にかわりましたが、このように日高川は、地域の人々の生活にとって大きな役割を果たしました。

椿山ダムと水利用

日高川では、今までに何度か洪水が発生しています。なかでも、1953年7月の記録的な集中豪雨は、谷あいの耕地も道も、日高川にかかる52本の橋もすべて飲み込み、死者・行方不明者約300人、流失家屋約2,200戸という大災害をおこしました。その後、復旧工事がすすめられ、1967年には、日高川の総合開発事業として、洪水を防いだり水力発電を目的として、日高川町椿山に多目的ダムがつくられることになり、1988年3月、県内最大の県営椿山ダムが完成しました。



日高川水運で栄えた船津（日高川町）



椿山ダムと国道424号（日高川町）

* 1 中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国との国境を流れる川で、アムノック川（朝鮮名）・ヤールー川（中国名）ともよばれている。

* 2 田辺市龍神村中山路から田辺市文里の港まで木材や物資をワイヤーロープで運んだ。

* 3 急流を乗り切るため、樽でつくった丈夫な船。

* 4 3枚の布（反物 巾36cmの布）をはった帆。

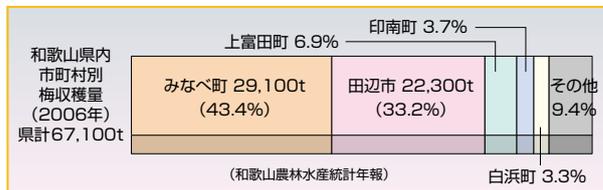
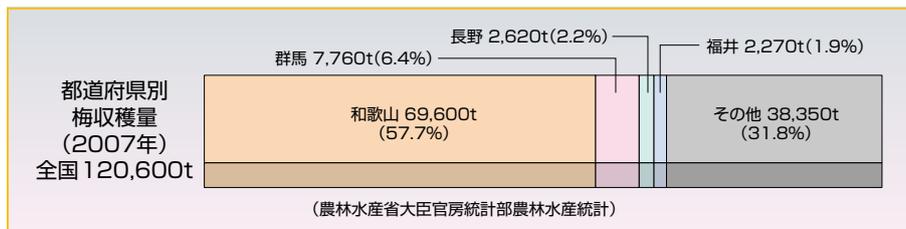
第3章 わかやまの自然と生活



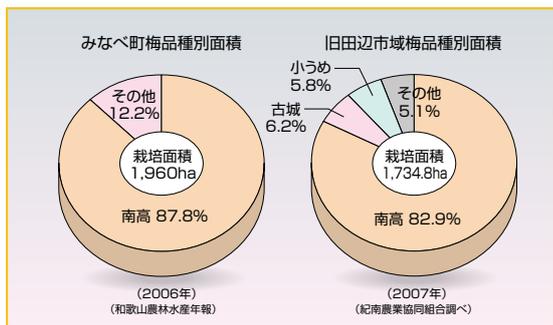
みなべ・田辺地方の梅づくり

日本一の梅産地

梅は和歌山県を代表する果物の一つです。全国の梅生産量の6割近くを和歌山県が生産しています。2007（平成19）年には、全国の収穫量の57.7%を占めました。なかでも、みなべ町と田辺市の合計が県内生産量の約77%にもなっています。みなべ町と田辺市は日本一の梅の産地です。



また、収穫量が多いだけでなく、10aあたりの収穫量も、和歌山県は全国平均のほぼ2倍あり、第1位です。これは、和歌山県は梅をつくる技術が高く、「南高梅」というすぐれた品種を持っているからです。



県内でつくられている品種は、「南高梅」が中心です。この梅の良いところは、収穫量が多い上に、つぶが大きくて、やわらかく、梅干用にも青梅用にもなることなどです。その栽培面積は、みなべ町では約88%、田辺市では約83%になります。田辺市ではそのほかに、青梅用の「古城」と「小うめ梅」がそれぞれ6%ほど栽培されています。

梅づくりの歴史

江戸時代には、田辺の領主が梅の栽培を奨励し、田辺から江戸へ梅干を送りました。

1901（明治34）年にみなべ町晩稲の内中源蔵が、4haの山を開いて梅の木を植え、梅干の工場も作りしました。これがこの地方で梅栽培と梅干加工が盛んになったもとになっています。梅干が軍隊の食料として使われたこともあって、第二次世界大戦が終わるまで、梅をつくる土地が広がっていきました。

1962（昭和37）年に、一般家庭で梅酒がつく



梅干の作業（みなべ町）

* 1 1950（昭和25）年、南部川村（みなべ町、当初は上南部村）に梅優良母樹調査選定委員会がつくられ、5年間調査選定を行い、「高田梅」が最優良母樹に選ばれた。県立南部高等学校園芸科の職員・生徒が調査研究に協力したことから「南高」と命名され、1965（昭和40）年に種苗名称登録された。

第3章 わかやまの自然と生活



日置川と古座川のダムと観光



山村の移り変わり

紀伊山地南部のほぼ中央部に
はてなし 果無山脈や おおとうざん 大塔山 (1,122m) がそびえています。果無山脈からは ひき 日置川、大塔山からは こざ 古座川が太平洋にそそいでいます。日置川も古座川も上流は雨が多いのでいつも豊かな水をたたえており、川すじの人々はこれらの川と深いかわりをもってきました。

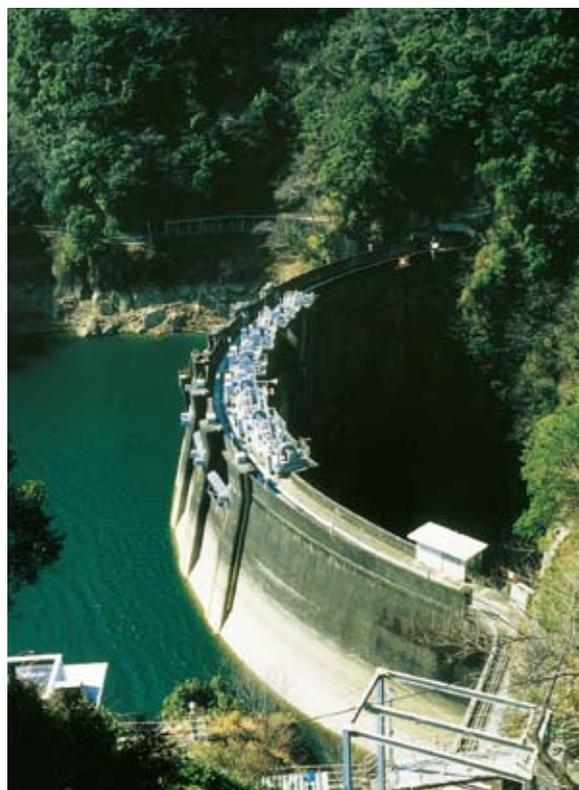
山村では林業がおもな産業です。道路が発達していなかった

時代には、川は交通手段としても大きな役割を果たしていました。熊野川は大きな川なので筏を組んで流すことができましたが、日置川や古座川は曲がりくねった川で、筏が組めず、「丸太流し」といって木材を1本ずつ河口まで流しました。*1 また、木炭などの林産物は底の浅い「平田船」という川船に積んで河口まで運びました。帰りの船には、米や塩、しょうゆ 醤油などの食料品を積んで川を上りました。しかし、道路ができ、自動車を利用できるようになると、平田船もしだいに姿を消しました。

1945（昭和20）年ごろから、この2つの川にダムを造る計画がもちあがりました。古座川では、和歌山県が古座川町の佐田に七川ダムを、日置川では、かんざい 関西電力（株）が田辺市の合川に どうがわ 殿山ダム*2を造り、水力発電所を建設するというものです。電気を送って きなん 紀南地域の人々に役立てる目的がありました。しかし、ダム建設によって丸太流しができなくなったり、アユが上流まで上れなくなります。また、住み慣れた村が湖の底に沈んでしまう



古座川の七川ダム（古座川町佐田）



日置川の殿山ダム（田辺市合川）

*1 管流しのことをこの地域ではこう呼んでいる。
 *2 重力式コンクリートダムで、堤高58m、貯水量3,080万㎡。

ことになるので、日置川でも、古座川でも、反対運動がございましたが、七川ダムは1956年に、殿山ダムは1957年に完成しました。特に殿山ダムは日本で最初にできたアーチ式ダムとして注目を集めました。

発電所の建設によって、そのころ不足していた電力を補うことができました。日置川では、1958年の集中豪雨のときに、ダムの放流によって下流の村や町が大水害を受けました。その後、河川の改修を進めるとともに、ダムの放流時には警報などで知らせて安全を図るようにしています。

山村の観光と物産

日置川流域は、1971年に大塔日置川県立自然公園に指定されました。なかでも上流の百間山溪谷は、約3kmにわたって滝や淵、甌穴などがあり、1966年に県名勝・天然記念物の指定を受けました。川沿いの自然林には、ニホンカモシカ（国指定の特別天然記念物）がすみ、百間山溪谷の入口には、カモシカ牧場がつくられています。

ニホンカモシカは、本州・四国・九州の山地に多く生息しており、大塔山には数百頭がいるといわれています。ニホンカモシカは親子連れか1頭だけで500～1,000m四方の狭い範囲で一生を過ごすのが特徴です。

山村の産物として、日置川上流の山地では、シメジ・シイタケ・サカキ・シキミが作られ、谷間ではワサビも栽培されています。また、田辺市平瀬では、品質の良いシシトウを露地やビニルハウスで栽培し、京阪神に出荷しています。中流の白浜町市鹿野は、古い歴史をもつ川添茶の生産地です。



百間山溪谷（田辺市熊野）



百間山のカモシカ牧場（田辺市熊野）



川添茶（白浜町）

古座川沿いの古座峡から太地町の浦神までは、熊野酸性岩という火成岩が弧状に分布して、古座川の一枚岩（国指定の天然記念物）や天桂岩、少女峰など美しい景色が見られます。

この古座川流域では、ユズの加工品・シイタケ・備長炭などの特産物も有名です。

* 1 ダムをアーチ形にして、水の圧力を兩岸の岩で受け止め、コンクリートの使用が少なくすむ方法。

* 2 第1編 第1章「大地からのおくりもの」21ページ参照。

第3章 わかやまの自然と生活



山深い熊野川の生活



関連地域の位置

熊野の山と森林

熊野川は、わが国の代表的な多雨地帯である大台ヶ原や大峰山脈を源とする北山川と十津川が合流し、新宮市で太平洋に流れこんでいます。

1年間に4,000mmも雨が降る熊野の山地は豊かな森林を作っています。

大峰山脈の海拔1,500m以上は、シラビソやトウヒなどの亜高山性の常緑樹林、1,000mから1,500mの大台ヶ原には、ブナ林の温帯性落葉広葉樹林、玉置山(奈良県1,076m)の1,000m以下は、ウラジロガシやアラカシなどの暖帯性常緑広葉樹林となっていて、山地の高さによって樹木の種類が違ってきます。また暖かい黒潮の影響もあり、那智原始林や熊野灘の海岸には、ウバメガシが群がり生えているところが見られます。

和歌山県・奈良県・三重県の3県にまたがる熊野川流域の森林面積は12万7,000haで、流域面積の約94%を占めています。



紅葉する熊野の山々

熊野材(紀州材)と水運

熊野材は、紀ノ川上流の吉野材とともに紀伊山地を代表する木材で、新宮市はその集散地として栄えました。



北山川の観光筏下り(北山村)

明治時代には、おもにモミ・ツガなどの天然林が切り出され、大正時代からはその切り出されたあとにスギ・ヒノキが植えられました。第二次世界大戦後は天然林が少なくなり、今ではほとんどが、スギ・ヒノキの人工林になりました。

切り出された木材は、おもに板や丸太に製材されて建築材料などに使われますが、その他にも割り箸に加工されたり、細かな木くず(チップ)にされて紙の原料になります。

第二次世界大戦後、阪神工業地帯に電力を送



熊野川のジェット船（新宮市）

ることや、たびたび起こる水害を防ぐためにダム
の建設がはじまりました。これにあわせて、ダム
建設資材の運搬や、筏にかわる輸送手段として、
道路が整備されていきました。そのため、筏流し
は少しずつトラック輸送に代わり、1963（昭和
38）年3月、熊野川支流の北山川を最後に筏流
しは姿を消してしまいました。しかし、1979年
に観光用としての筏下りが北山村で復活し、今で
は観光客でにぎわっています。

人や物に乗せて熊野川を行き来したのは「団平
船」とよばれる木造船でしたが、それにかわって

登場したのがプロペラ船でした。スクリューをつけた船にすると、水深の浅いところでは川底につかえる
ため、船の後ろにプロペラを取りつけて、それを回して進む船が、1918（大正7）年に考えだされまし
た。これを発明した鳥居丈之助は、その前の年に、アメリカ人の飛行士アート・スミスが新宮の河原で曲
芸飛行をしたのを見てヒントを得たといいます。「団平船」では、新宮から本宮まで上るのに2日以上かか
りましたが、プロペラ船では3時間半で行けるようになりました。そして1965年には、より静かで、速い
ジェット船が運航するようになり、今も瀨峡観光船として活躍しています。

熊野川流域の特産物

熊野川流域には、豊かな自然にはぐくまれた、いろいろな特産物
があります。熊野地方によく見かけるのが、「めはり寿司」と「さ
んま寿司」です。めはり寿司は、大きなおにぎりを、よく漬かった
高菜で巻いて作ります。もとは山で働く人々のお弁当で、あまりに
大きいので、食べるときに大きく口を開けて目をはるところから、
この名がついたともいわれています。今は、秋祭りや正月の料理と
してよく作られます。



たかなで巻くめはり寿司

また、茶の栽培も盛んです。茶は、気温が高く、雨や霧が多くて水はけのよい土地を好みます。田辺市
本宮町の三里や請川で生産される音無茶や、那智勝浦町色川の色川茶などが有名です。

豊かな木材を利用して田辺市本宮町皆地では、ヒノキで編んだ手作りの皆地笠が作られています。この
笠は、屋外の作業に欠かせないものであっただけでなく、熊野三山へ参詣する人々により、日よけや雨よ
けとして使われてきた歴史があります。しかし、作れる人が高齢となったり、材料となる樹齢60年以上の
良質のヒノキも少なくなってしまうたりして、今は継ぐ人がいなくなっています。田辺市本宮町では、イ
チゴや花の促成栽培が行われ、土地でとれるシソをしぼったジュースは特産品となっています。また、「熊
野牛」の飼育も行われています。「熊野牛」は、昔からこの地方で飼育されていた和牛です。

全国でただ1つの飛び地の村である北山村では、ジャバラが特産品になっています。ジャバラはミカン
やユズと同じ柑橘類ですが、ユズに比べて倍の量の果汁を含んでいます。村は65才以上の高齢者が約45%
を占めていますが、ジャバラからつくったジュース・酒・せっけんなどを販売し地域の生活にうるおいを
与えています。

第3章 わかやまの自然と生活



熊野の山のめぐみ



熊野の雑木林利用

熊野地域には、もともとカシ類を中心とした常緑広葉樹の照葉樹林がひろがっていました。こうした森はいわゆる雑木林で、人間が一定の管理をし続けることで、利用したい植物が多く取れる状態に森の成長をとどめておくことができます。熊野では、備長炭を焼いたり、養蜂を行ったり、キノコを栽培したり、山村の生活に利用する材料を採集したりする目的で、雑木林を利用してきました。豊かな山は、きれいな川を育み、人々は川漁をして季節の魚やカニ・エビなどをとって食料としました。



熊野蜜の収穫

備長炭（白炭）は、熊野の雑木林利用の代表的なものです。その硬さと品質において、世界一の炭と言われる備長炭は熊野で生まれました。紀州藩がこれを奨励し、大きく発展しました。材料は、1965（昭和30）年までは雑木林の木は何でも焼いたのですが、やはり、温暖な地域に生えるウバメガシが最も良質で、その他のカシ類も焼かれました。焼いた炭は、ススキの茎で作った俵で出荷しました。

江戸時代の百科事典『日本山海名産図会』は、“熊野蜜が日本第一”としています。熊野では現在でも、野生のニホンミツバチを養蜂しています。セイヨウミツバチが、1種類の決まった花から蜜を集めるのに対し、ニホンミツバチは、雑木林の中にあるありとあらゆる花から蜜を集めます。比重が重く、粘りがあり、濃厚な甘さの熊野蜜は、現在でも高価なものです。野生のハチのため飼育が難しく、熊野の養蜂は、気まぐれなハチといかに付き合うかが大切だそうです。

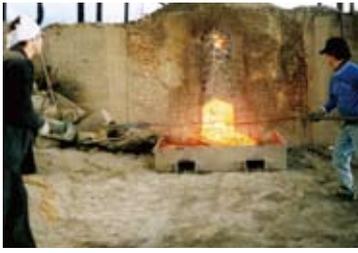
雑木林にはたくさんの動物がいたので、古くからイノシシ・シカなどの狩猟が行われてきました。狩猟は、犬と人が連係して行うもので、犬が動物の動きを止め、それを鉄砲で撃ちます。「紀州犬」といえば白い犬を思い浮かべますが、熊野の地域ごとの在来種には、白・黒・茶・淡赤・ゴマなどがあり、狩猟犬として使われてきました。ニホンオオカミの血をひくとされる熊野の狩猟犬は、とても優秀であったといえます。

雑木林の落葉広葉樹の実、貴重な食料でした。カヤ・シイ・クリ・トチノキのほか、ブナ類・カシ類・ナラ類のドングリなどの実は、アク抜きをして食しました。また、雑木林ではキノコもたくさんとれ、干しシイタケは現金収入ともなりました。

熊野の林業

熊野の林業は、江戸時代後期から部分的に始まっていましたが、紀州藩が備長炭などの雑木林利用を積極的に進めたことによって、広い天然林が残っていました。明治時代になると、クロキ（黒木）と呼ぶモミ・ツガ、チリキ（散木）と呼ぶ天然のスギやヒノキをはじめとする、天然木が伐採されていき、1897

* 1 第2編 第3章「木材と熊野炭」144ページ参照。



備長炭窯出し

(明治30)年ごろからは本格的な植林が始まりました。岩場や崖地が多い熊野では、木を詰め込みすぎないように1町の広さに4,000本程度を粗植し、間伐しながら60年後に1,500本程度とするのが一般的でした。戦後、吉野式林業(1町に8,000~1万本と密植する)が本格的に導入されるまでは、山の7合目より上には植林しないなど、おおらかな林業が行われていたのが特徴で、昭和初期にはこれを「熊野式林業」と呼ぶこともありました。

熊野は、黒潮の影響で高温多湿、降水量も多いため、木が成長するのが極端に早く、年数のたった木には虫がつきやすい環境です。そのため、昭和初期までの林業では、60~80年で伐採期を迎え、サイクルが早いのも特徴でした(吉野林業では150~300年)。切って皮をむいた材木は、まずシュラ(丸太で作った滑り台)で山中から滑り下ろし、キウマ(そり)で川まで運び、そこから上流は管流し、中流~下流は筏流し(材木を筏に組んで流す)で運び、河口の市場や製材所に運びました。水量が少ない時期は、丸太で鉄砲堰(小さなダム)を作り、ためた水を一気に放流して材木を流すという、豪快な作業もあちこちで行われました。

山の神の信仰

山の神は、山仕事をする人がまつる神です。多くの恵みを与えてくれる自然に対して、畏敬の念を持っていたことのあらわれといえます。

山の神は多くの場合、集落と山との境目にまつられます。普段も山の木を切り始めるときに、酒などを供えて感謝する儀式を行うほか、11月7日には、山仕事の仲間が集って、山祭り(山の神の祭り)を行います。この日は、山の神が1年に1度山の木を数えて確認する日とされ、山仕事をする木の本に数えられて人間が木になってしまうと恐れられてきました。かつてはこの日に、みなで食事をして楽しんだり、相撲をとったりして、1日を過ごしたそうです。

現在でも山村では、山祭りが各地で行われており、山への感謝の気持ちを新たにするとされています。

熊野の山村の農業

熊野の山村でも米作りをしてきましたが、その水田は、主に棚田と天水田として作られてきました。棚田は、傾斜地を開拓し石積みをした水田で、水は上の田から順番に下へ流していきます。現在でも田辺市中辺路町高原をはじめ、いくつかの集落到規模の大きな棚田が残っています。一方、天水田とは、水路が無く雨水をためるだけの水田のことで、1年中水がた



畑の周囲に植えられた茶の木

まっているので、フケ(深田)とも呼ばれます。耕地にできる土地が限られた山深い村ならではのものですが、管理や作業の大変さから現在ではほとんどみられません。

一方熊野の畑作は、家のまわりの小規模な畑で、イモや雑穀などの自家消費用の作物栽培が古くから行われてきました。畑には、雑木林の木の新芽を肥料として使いました。茶粥を炊くための茶を畑のふちに植えている例もよく見られ、現在でも多くの農家が自家製の番茶を作っています。



山村の棚田

*1 1町は、1ha。
*2 第1編 第3章「日高川の山村」52ページ参照。

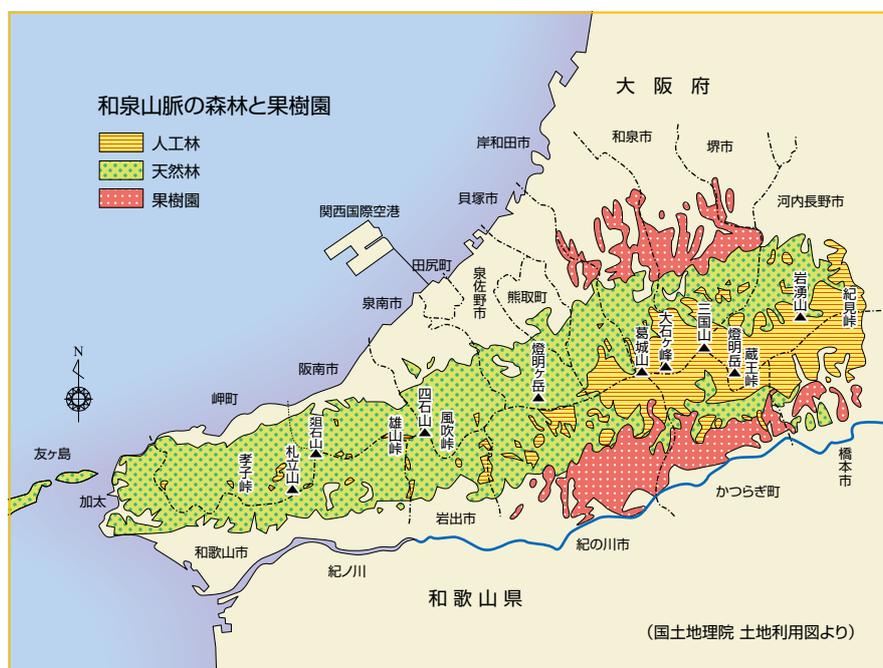
第3章 わかやまの自然と生活



和泉山脈の自然と都市の開発

多い人工林と私有林

和泉山脈は、大阪府と和歌山県の境になっていて、和泉葛城山脈とか葛城山脈ともよばれています。東の岩湧山（897m、大阪府）から主峰の和泉葛城山（858m）をへて、山並みは西にむかって低くなり紀淡海峡までつづきます。東西の長さは約60kmの山脈で、岩湧山から東へは大阪府と奈良県をへだてる金剛山地・生駒山地へと連なっています。



和泉山脈の森林は、地形的に西から東のほうに行くほど森林面積が広く、紀の川市から伊都・橋本地方にかけてスギ・ヒノキなどの人工林の割合が高くなっています。

森林面積のほとんどが私有林となっています。そのうち、個人や会社などの所有する私有林の割合は、和歌山市、岩出市、紀の川市、かつらぎ町、橋本市の各市町村ともおよそ90%を占めています。残りの公有林は、県や市町村がもつ山林のほか、

昔、村の入会地であったところが財産区有林として紀の川市や橋本市などに残されています。国有林の面積はほんのわずかで、和歌山市の瀬戸内海国立公園などの一部や、岩出市の風吹峠、紀の川市のごく一部に見られるにすぎません。



雄山峠を通る阪和自動車道

和泉山ろくの開発

最近、和泉山ろくの一部は開発がすすんで景色が変わってきています。

その丘陵地帯の開発は、1955（昭和30）年ごろからの高度経済成長期に、和歌山市や橋本市で

*1 国のもっている林野（国有林）以外のすべての林野で公有林、私有林をさす。
*2 山ろくの村の人々が共同で利用する山野。昔はまくさや肥料にする雑草・薪などをとった。

ゴルフ場がつけられたのが始まりです。1965年ごろからは、J R阪和線の六十谷駅の北方に建設された鳴滝団地や岩出市紀泉台など、各地に住宅団地がつけられるようになりました。1975年になると、橋本市の北部の台地に城山台・三石台などの大規模な住宅地ができ、大阪府への通勤者が増えて、橋本市は衛星都市としてのはたらきを強めました。1985年ごろからは、和歌山大学の移転や近畿大学の新キャンパスの建設のほか、関西国際空港の埋立ての土砂が和歌山市の加太からとられたり、大型の開発がすすみました。さらに、平成期に入ってから、橋本市の小峰台・あやの台や、和歌山大学近くのふじと台などの宅地開発や、山脈に沿う高台には京奈和自動車道の建設がすすめられています。

自然の保護と保全

和泉山脈には、孝子峠（106m、和歌山市）、雄山峠（181m、和歌山市）、風吹峠（216m、岩出市）、蔵王峠（553m、かつらぎ町）、紀見峠（380m、橋本市）などの峠道があり、昔から人と物の交流が盛んでした。これらの峠は、トンネルや高架橋によって、鉄道や自動車道となり、峠道は大きく変わりました。

一方、開発するだけでなく、山林の保全はきわめて大切です。和泉山脈の山頂に広がるブナの原生林は国の天然記念物に指定されていますが、自然環境の保護のために瀬戸内海国立公園・金剛生駒紀泉国定公園・近畿圏近郊緑地保全区域などの指定もみられます。



ハイランドパーク粉河

2001（平成13）年に成立した森林・林業基本法では、木材生産だけでなく水源や土壌の保全、地球温暖化の防止、住民の保健休養など森林のもつ役割を明らかにしています。和泉山脈でも、ところどころで、水源かん養保安林・土砂流出防備保安林・保健保安林などの標示板をみることができます。また、山頂の展望台や、その西につづく紀の川市の「ハイランドパーク粉河」の展望台（748m）の付近は、住民の憩いの場となっています。そして、岩出市の県立森林公園「根来山げんきの森」（250m）は、木と人が共生する森林レクリエーション施設として知られています。



(参考資料)
 ・近郊緑地保全区域図(国土交通省国土計画局)
 ・和歌山県保安林配置図(和歌山県)
 ・和歌山県自然公園・自然環境保全地域位置図(和歌山県)

* 1 大阪市のような大きな都市を惑星（地球）とすると、和歌山市や橋本市はそのまわりにある衛星（月）にあたり、大阪との関係が深い。
 * 2 人の手の加わっていない自然のままの森林。

第3章 わかやまの自然と生活



紀伊水道沿岸の漁村

リアス式海岸の漁村

和歌山県は、山が海岸近くまでせまり、のこぎりの歯のように岬や入江が出入りするリアス式海岸になっています。そのため、入江は漁村にとっても天然の良港となり、県内には95の漁港があります。

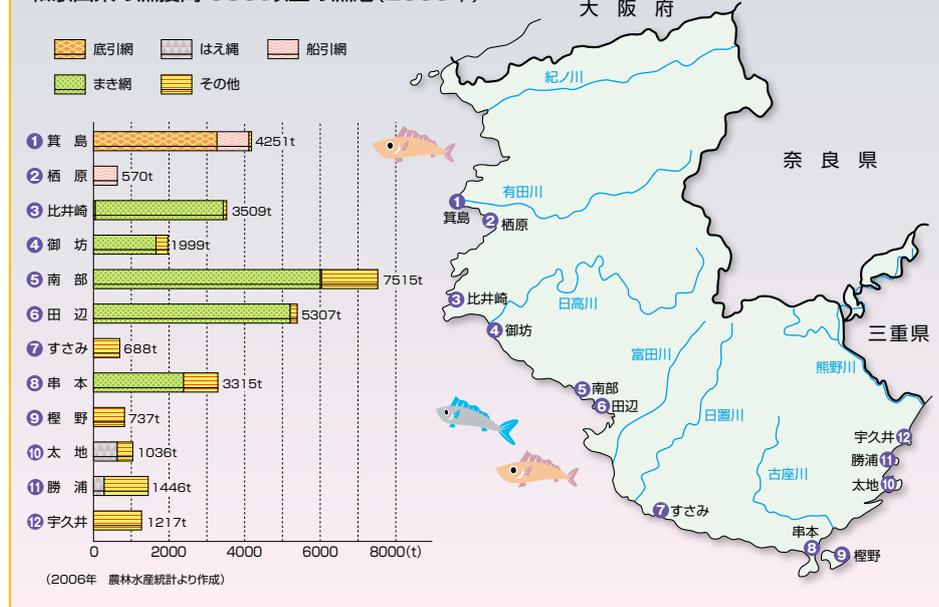
和歌山県の漁場は、紀伊水道の日ノ御崎を境に北の瀬戸内海区と、南の太平洋南区に分けられています。

紀伊水道沿岸の漁業は、おもに沿岸漁業と沖合漁業で、小型船で日帰りの漁業です。加太（和歌山市）は、友ヶ島を中心にタイの一本釣りが有名です。加太では1年中タイが取れますが、赤いマダイは、春に太平洋から瀬戸内海へ産卵のために回遊してくるので、そのころが一番よい漁期になります。一本釣りをするには、技術が必要なので高齢の人も多く仕事についています。雑賀崎（和歌山市）から湯浅や唐尾漁港（広川町）にかけては、紀伊水道での底引網漁業がさかんで、箕島（有田市）のタチウオの漁獲量は全国1位です。



雑賀崎の底引網漁船の出漁（和歌山市）

和歌山県の漁獲高 550t以上の漁港(2006年)



現在120隻の小型底引網漁船があり、紀伊水道の沖合で操業しています。1隻の漁船に2人乗り、午前3時から午後2時ごろまでタチウオをとり、市場のせりに出し、おもに大阪方面に運んでいましたが、近年は韓国への出荷が増えてきています。1975（昭和50）年ごろから底引網漁船もそれまでの木造船にかわってプラスチック船になり、漁業の能

*1 2006（平成18）年（『和歌山の水産』2008年 和歌山県農林水産部水産局）。
*2 魚のよく釣れる場所をえらび、船をとめて、生きたエビなどをつけた釣糸を海底におろしてタイを釣る。



箕島の底引網漁船（有田市）



紀伊水道での底引網漁船



タチウオの水揚げ

率もよくなりました。将来タチウオの漁獲量が減らないようにするため網の目を大きくして、稚魚はできるだけとらないようにしています。

また紀伊水道では、シラス（イワシの稚魚）をとる船引網漁業もさかんです。2隻の船で網を引き、袋網の部分が細長くなっています。その形が下着のバッチに似ているので、バッチ網ともいいます。以前はどの漁村でも地引網が*1あって、沖で入れた網をおおぜいの人たちが浜に引きよせて魚をとっていました。煙樹ヶ浜（美浜町）

では今も地引網でシラスをとっています。シラスは地元業者が釜あげ・ちりめん加工しています。また、阿尾（日高町）などから出港するまき網漁船は、日ノ御崎から白浜町の市江崎にかけての漁場でイワシ・アジ・サバなどを夜間に漁獲しています。



タチウオ日本一の看板（有田市）

海岸はレジャーの場

海は漁業だけでなく、浜辺の海水浴や潮干狩り、そしてレジャーの釣りの場でもあります。紀伊水道沿岸は大阪にも近いので、多くの人たちがレジャーのために訪れます。現在、水上スキー・ウインドサーフィン・ヨット・ダイビングなど海のレジャーが盛んです。磯ノ浦（和歌山市）ではサーフィンを楽しむ人でにぎわっています。1994（平成6）年につくられた人工島のマリーナシ

ティ（和歌山市）は、地中海の港町をイメージしたテーマパークや、黒潮市場、ホテル、さらに多くのヨットをつなげるマリーナ施設などがあります。また和歌山市北港から由良にかけてはいくつかの釣り公園があり釣り人が多く集まります。1997年に行った調査では、太平洋南区における遊魚で釣った魚の量は和歌山県の割合が一番多かったほどです。

1996年7月20日の「海の日」が祝日となったのを記念して、全国美しい海辺や浜を選んだ「日本の渚百選」に、白崎海岸（由良町）と白良浜（白浜町）が選ばれました。白崎は石灰岩の白い岬と青い海が特色で、「瀬戸内夢五十景」や「日本の夕陽百選」にも選ばれ、1997年白崎海岸は県立自然公園に指定されて、オートキャンプ場・ダイビングスクールなどができました。また日ノ御崎には、灯台を中心にカナダ資料館・バンガロー村などがあります。



和歌浦湾の海岸（和歌山市）

*1 バッチは和歌山県での方言。
*2 灯油で魚を集め、1〜2隻の網船で、魚群をかこみ、網をしぼって魚を逃げないようにして船に引き上げる漁法。
*3 レジャーで魚を釣ること。

第3章 わかやまの自然と生活



名田から枯木灘沿岸の農漁業

園芸農業のさかんな海岸線

日ノ御崎^{みさき}から潮岬^{しほのみさき}までは、田辺湾^{たなべわん}のほかは山地が海にせまる海岸で、いたるところに海岸段丘^{かいがんだん}がみられます。特に御坊市名田^{ごぼうなだ}から印南町^{いなみ}にかけては、海岸段丘が広がっています。昔は、サツマイモ・除虫菊^{じゆちゆうきく}・麦などの畑作地でしたが、1966（昭和41）年^{*1}に日高川^{ひだか}から水をひく畑地^{かんがい}灌漑が完成して、キヌサヤエンドウ・レタス・スイカ・花などの栽培^{さいばい}ができるようになりました。1年を通して霜^{しも}もおりない暖かい気候であるうえに、ビニルハウスを利用していろいろな花が栽培されています。1986年ごろからは花の栽培にきりかえる農家が増えてきました。



名田の海岸段丘でのフレーム（御坊市）

2006（平成18）年、和歌山県はスターチスの生産額が全国1位で、全国の市町村でも御坊市が1位、印南町が3位^{*2}となっています。宿根カスミ草^{しゅこん}・スイートピーの栽培も盛んです。

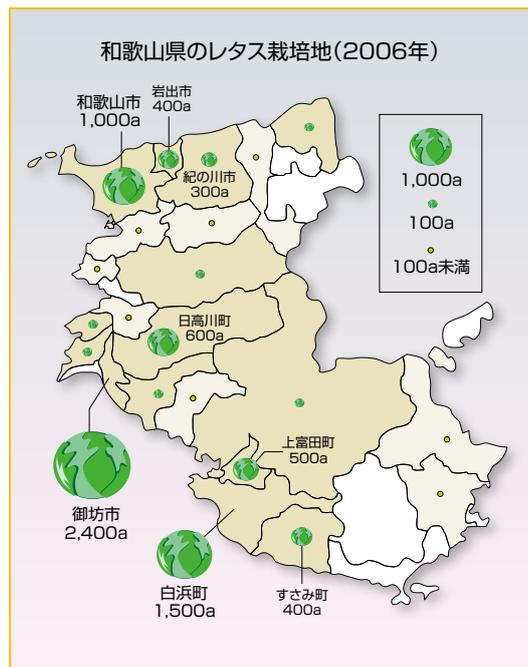


名田のスターチスの栽培（御坊市）

すさみ町は和歌山県のレタス栽培の先進地

で、1941年、同町の江住ではじまりました。1950年には栽培が本格化し、栽培方法の改良や販売先の拡大をはかり、1965年から十数年は生産量は増えつづけ、有名になりました。その後は、県内の各地でレタス栽培が広がりましたが、近年は減少しています。

串本町^{くしもと}ではストックの栽培が盛んです。「平見^{ひらみ}」とよばれる平らな海岸段丘の上では、サツマイモと麦しかつくれませんでしたが、そこで少しでも収入のよい作物として、1956年に和深^{わふか}でストックの栽培がはじまり、その後、栽培の先進地であった千葉県から新たな品種を導入して栽培が安定しました。そ



*1 蚊取り線香の原料になっていた。

*2 近畿農政局和歌山農政局統計〈2008（平成20）年〉。

して、ストック栽培地は和深から潮岬・大島まで広がり、露地とハウスの組み合わせでストックを栽培し、夏小菊などもつくるようにして、紀南の代表的な産地になりました。

田辺湾・すさみの漁業

田辺湾はリアス式海岸です。湾内の田辺港は、まき網漁業が盛んな港です。また、波静かな田辺湾を利用して、早くから真珠やハマチの養殖をしてみました。その後、真珠の暴落やアコヤ貝の病気によって真珠の養殖をやめ、魚の養殖だけにしました。1960年代に入り、ハマチの養殖がはじまり、マダイ・ヒラメなどを卵から育てるようになり現在は、マダイの養殖を主に行っています。1995年には漁業協同組合の大きな市場がオープンし、白浜温泉の観光客でにぎわっています。



田辺港のまき網漁船（田辺市）

一方、すさみ町から串本町にかけての海岸は枯木灘海岸といわれています。太平洋から吹きつける潮風



田辺湾のタイの養殖（白浜町）

が強いため、海岸の樹木は枯れ木のようにっており、風をさけるための良港がありません。船人にとっては、木影のない陸路のように気の休めない海といわれてきました。

すさみ町では、明治時代の末ごろ、ぎじ針（えさにみせかけた釣針）をつけたひき縄釣りの漁業が行われるようになりました。地元ではこれをケンケン釣漁法といっています。おもにカツオ・ヨコワ（マダロの稚魚）などを釣るのです。紀南の沖合だけでなく、船団を組んで対馬（長崎県）や伊豆（静岡県）方面へも出かけています。



ケンケン船（すさみ町）

紀南の海岸美は雄大で、1970年に日本で最初の海中公園に指定されたのが串本海中公園です。このあたりの海は透明度が高く、世界でも最北限になる群生のみごとなテーブルサンゴもみられ、スキューバダイビングも盛んに行われています。また、海中展望台や全長24mの水中トンネルで海底散歩が楽しめます。このサンゴの群落は世界からも注目され、2005年に「ラムサール条約」に登録されました。

* 1 船の両側に出した竿に各3本、中に1本の計7本のひき縄にぎじ針をつけて船を走らせて釣る。魚が食いつくと潜行板が水面に上がるようになっている。

* 2 世界的に重要な水辺の生態系を守るためにつくられた国際条約。第1編 第2章「わかやまの海と生きもの」31ページ参照。

第3章 わかやまの自然と生活



熊野灘沿岸の漁業



黒潮の流れる漁業の町

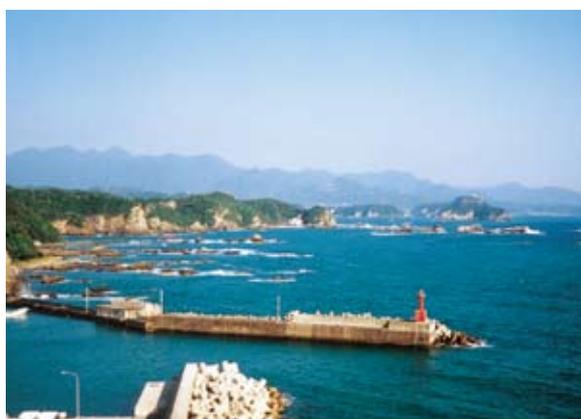
太平洋沿岸の^{しおのみさき}潮岬から三重県の^{みえ}志摩半島までは、三重県^{みはま}御浜町の^{しちりみはま}七里御浜のほかは入江の多いリアス式海岸で、^{りょうこう}良港にめぐまれています。また、^{おきあい}沖合を^{くろしお}黒潮が流れるので暖流にすむ魚が豊富で、わが国を代表する^{さか}漁業の盛んなところでは、なかでも、^{かつら}勝浦の^{たいじ}マグロ漁業、^{ほげい}太地の^{くしもと}捕鯨、^{くしもと}串本の^{くしもと}カツオやトビウオ漁は有名です。

勝浦のマグロ漁業

勝浦港は、^{えんよう}遠洋^{はえなわ}マグロ漁船の基地として知られています。マグロ^{はえなわ}延縄漁船が日本近海から南方^{さか}グアム島付近まで航海し、5日から40日かけてクロマグロ・メバチマグロ・キハダマグロ・ビンナガマグロなどをとっています。^{*1}延縄は、50～150kmの長さの^{れい}ロープに、^{れい}冷凍した^{つりばり}アジ・サンマ・サバをえさとした500～2,500本の^{つりばり}釣針をつけて、40～250mの深さで6時間以上も流してとる漁法です。勝浦港では、和歌山県だけでなく、^{こうち}高知県、^{みやざき}宮崎県や^{おおいた}大分県などの船が^{みずあ}マグロの水揚げをします。12月から5月にかけては、1日に7,000匹もの^{みなと}マグロが^{みなと}港の市場にならべられることもあります。マグロは、「^{なま}紀州勝浦産^{なま}マグロ」として、1匹ずつ箱に入れられて^つ氷詰^{けいはん}めされ、^{しん}低温^{なごや}輸送のトラックによって、^{しん}すぐ^{なごや}に京阪神や^{なごや}名古屋・^{しん}関東方面に運ばれます。



勝浦港のまぐろ（那智勝浦町）



鯨が追い込まれる太地湾（太地町）

太地の捕鯨

太地港の年間の^{ぎよかくりよう}漁獲量は1,036t（2006年度）で、^{いせ}伊勢エビや^{いせ}アジ漁が主に行われていますが、全国的に^{めづら}珍しいクジラ漁も行われています。クジラ漁は、資源保護のために^{ほけい}国際捕鯨委員会（IWC）によって規制されていますが、対象外の^{ほけい}ツチクジラや^{ほけい}ゴンドウクジラなどを、^と水産庁などの指導を受けて^と漁業会社が捕っています。また、^と小型船による^と伝統的な^と追い込み漁も行われています。^{*2}1969（昭和44）年にオープンしたくじら博物館では、ク

*1 胸びれが長く、体調1.2m、体重30kg前後に成長する。地元では「とんぼ」ともよばれている。

*2 湾内の入り江にクジラを追い込み、仕切網で囲って捕獲する。

ジラの生態や捕鯨に関する貴重な資料が展示されています。

串本の漁業

串本は沖合を黒潮が流れ、豊富な海の幸に恵まれています。特に、カツオやアジ、サバ類が有名ですが、春や秋にはトビウオ漁も行われています。また串本の浜と大島に囲まれた波静かな海面では、マダイやクロマグロの養殖も行われています。クロマグロの完全養殖は、串本町にある近畿大学水産研究所大島実験場で、30余年にわたって研究した結果、2002（平成14）年に世界で初めて成功しました。このように、漁業は串本町を代表する産業ですが、水揚げ額は最盛期の半分まで激減しており、一時は盛んであった養殖業も、1998年に47あった業者数が半減しています。このため串本町では、養殖マダイや養殖クロマグロ・カツオなどがより高い値段で売れるように、水揚げ後すぐに処理をして味や品質が落ちないようにしたり、輸送する時の温度をきちんと管理するなど、さまざまな取り組みをしています。



串本の漁港と養殖いかだ（串本町）

このため串本町では、養殖マダイや養殖クロマグロ・カツオなどがより高い値段で売れるように、水揚げ後すぐに処理をして味や品質が落ちないようにしたり、輸送する時の温度をきちんと管理するなど、さまざまな取り組みをしています。



わかやまの知識



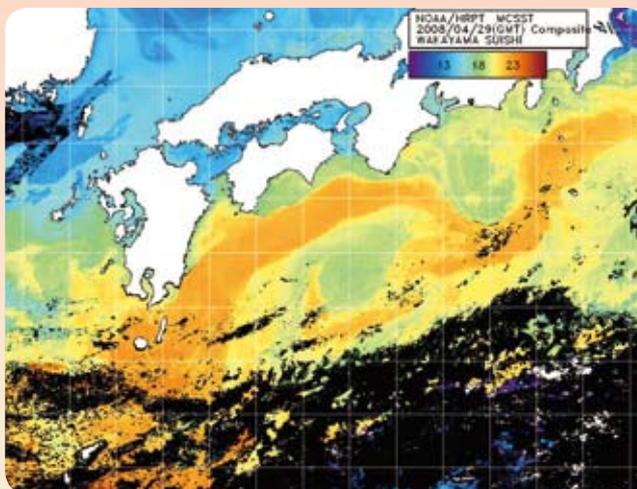
【人工衛星と黒潮の流れ】

温度のちがう海水がぶつかる潮境は、魚のえさとなるプランクトンが多く、よい漁場となります。

潮岬の沖を流れる黒潮は、10年くらいの周期で大きく曲がって陸から遠く離れて流れることがあります。このときは、漁場が遠くなるので、紀南ではカツオ・マグロの水揚げが少なくなります。紀伊水道では、タイがよく釣れるようになります。逆に黒潮が海岸に接近するときは、その分流が紀伊水道に入りこんで塩分が少し濃くなり、マダイはえさを食わなくなり漁獲量は減少します。

1995（平成7）年4月、潮岬沖でカツオの引縄船が百数十隻出てもカツオを発見できなかったのです。原因は黒潮の流れが大きく変わり、魚群を追いきれなかったためでした。1997（平成9）年から、正確な黒潮の流れをつかむ人工衛星からの海水温度のデータが、串本町の県水産試験場に取り入れられ、各漁業協同組合にも送られるようになりました。

このように、魚にはその魚に適した水温があるので、それがわかれば漁場の予想がたてられるのです。



人工衛星からの黒潮の流れ（濃い茶色の部分）

第3章 わかやまの自然と生活



城下町から近代都市へ



関連地域の位置



内堀と丸の内のビル街（和歌山市）

県都・和歌山市

和歌山市は、豊臣秀吉が築城をはじめ、のち浅野幸長が城下町を整備しました。1619（元和5）年、徳川頼宣が55万5,000石の藩主として入国してからは、御三家紀州藩の城下町にふさわしく拡張し栄えました。

今も和歌山城には、古くからの石垣や内堀が残り、第二次世界大戦後に復元された天守閣が海拔49mの虎伏山にそびえています。歴史の面影をしのぼせる公園として市民に親しまれています。内堀に面した一ノ橋御門か

ら外堀の市堀川の南にあった京橋御門まではかつては丸の内と呼ばれ、上級武士の屋敷地でしたが、今は市役所・銀行などが建ち並ぶ政治・経済の中心地となっています。京橋から北へと続く本町通りはかつての町人町で、今も商店が集中する本町商店街となっています。また、和歌川沿いには、染色・木工・皮革などの工場が建ち、紀ノ川河口の海岸は製鉄・化学工場地帯となっています。

和歌山市の玄関は、東のJR和歌山駅と北の南海電鉄和歌山市駅です。また、和歌山港からは四国と結ばれ、関西国際空港にも近く便利です。

市内には、T字路になったかつての城下町の道路も残っていますが、南北の「中央通り」、東西にのびる「けやき大通り」など、広く美しい並木道に変わりました。

かつて外堀であった市堀川や和歌川の水質汚濁をなくすために、紀ノ川の水を入れたり、汚水処理場をつくっています。



*2 和歌山市街の中心部



*1 城下町には道路をT字型にして行きどまりをつくり、外敵を防ぐ役目もあった。
*2 国土地理院1万分の1地形図「和歌山」（1999年）。



*1 城下町であった田辺

紀南の中心都市・田辺市

田辺の城は、1590（天正18）年、会津川河口の右岸に豊臣秀吉の家臣杉若氏の上野山城があり、のちに浅野氏の州崎城、さらに田辺城と三たびかわりました。田辺は1619年、紀州徳川家の家老安藤氏の領地となり、城下町も整えられました。現在は水門の石垣が残されているにすぎません。

会津川対岸の江川は、江戸時代から廻船が停泊した港でしたが、1927（昭和2）年の大阪商船の寄港からのちは、文里の港に移りました。

1932年に紀勢西線が田辺まで開通して、海路にかわって、J R紀伊田辺駅が田辺の玄関となりました。田辺市は、2005（平成17）年に周辺町村と合併し、人口は約8万人（2008年）の県内第二の都市です。梅干・製

材・水産加工品・ボタンなどの地場産業をもち、商業の範囲は紀南地方におよんでいます。

田辺市は、かつての城下町の狭い道をなくし、1981年にはJ R紀伊田辺駅前から南へ幅18mの「田辺大通り」、さらに東西に「元町新庄線」が市内の中心道路となりました。また市内には、「袋町」の地名もあるように、行き止まりの多かった町並みも新しい土地区画整理事業が実施され、住宅団地も周辺の丘陵に建てられています。また、国道42号のバイパスが郊外につけられるとともに、2007年、阪和自動車道が田辺まで開通し、インターチェンジができました。



会津川と田辺城の水門・本丸跡（田辺市）

熊野の城下町・新宮市

新宮は、熊野三山の一つ速玉大社の門前町であり、江戸時代からの城下町でもあります。町の中央をとる国道42号となっているかつての熊野街道の西側に門前町、東側に武家屋敷がありました。

1601（慶長6）年、浅野氏が熊野川河口の丹鶴山に城を築きはじめましたが、1619年紀州徳川家の家老水野氏が城主となり、城郭を整備しました。城あとには今も石垣が残り、公園となっています。



新宮城址からみた市の中心街（新宮市）

新宮は、熊野地方の木材の集散地であり、その運搬は1962年の国道168号の開通によって、かつての筏流しからトラック輸送に変わりました。そして、熊野川河口の水面貯木場は埋め立てられ、スギ・ヒノキの熊野材の原木市場となりました。一方、三輪崎にある新宮港は、おもに外国から木材やチップ材を輸入し、市内製材・製紙工場で染色にしたのち、地元のほか、東京・名古屋方面に出荷されています。また新しく自動車・電子関係の工場もできました。

*1 国土地理院5万分の1地形図「田辺」（1997年）。

*2 1901（明治34）年ごろ、朝采（上富田町）で副業として貝ボタンが作られはじめ、のち田辺市に広まった。

第3章 わかやまの自然と生活



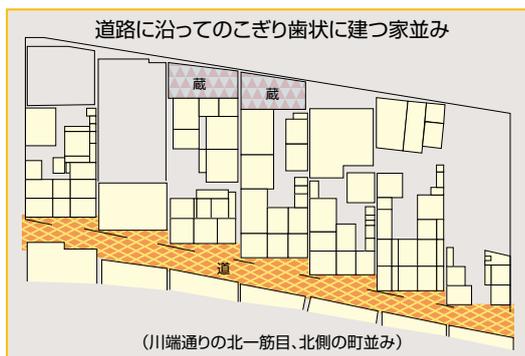
歴史のある町並み

黒江の町

黒江は海南市の北西部にあり、伝統ある紀州漆器の生産地として知られています。その地名は万葉集にも歌われた昔の入り江に、黒牛に似た大きな岩があったことから生まれたといわれています。黒江は江戸時代の熊野街道が通った黒江坂の西に、紀州檜を使った木椀を起源とする漆器の町として、紀州藩の保護を受け、発展しました。その後、1879（明治12）年には戸数が1,343戸、人口は5,356人を数え、すでに現在の黒江の人口を上まわっていました。



*1 黒江の町



(川端通りの北一筋目、北側の町並み)

町の中央には港につながる運河が掘られ、兩岸の川端通りには漆器問屋が、その裏通りには漆器職人の仕事を兼ねた住宅が軒を連ねました。港の荷揚げ場から黒江坂にかけて山側より木地師・下地師・塗師・加飾師というふうに、それぞれの職人ごとの町並みができていました。1930（昭和5）年には、商工業に従事する人が黒江の町全体（西の船尾地区を含む）の約90%にもなり、そのほとんどが漆器産業にたずさわっていたそうです。

大正時代に運河が埋め立てられ、幅12m、長さ230mの道路となった川端通りとその裏通りには、今も切妻屋根に紀州連子とよばれる格子や漆喰壁のある低い2階建ての古い家屋がみられます。それぞれの家屋は道路に沿って斜めに建てられたので、のこぎり歯状の家並みになっています。道路に面した三角形の空き地は、駐車場などに使われていますが、もとは漆器の原料や製品、荷出し車などの置き場として使われていたようです。

漆器に化学原料が用いられるようになると、製造業者の多くが1970年ごろから黒江の北西に位置する岡田につくられた漆器団地に移転して、町は変わっていきました。しかし、手作りや機械化の技法を合わせもつ紀州漆器の伝統を守りながら、古くからの町並みを活かした町づくりが進められています。



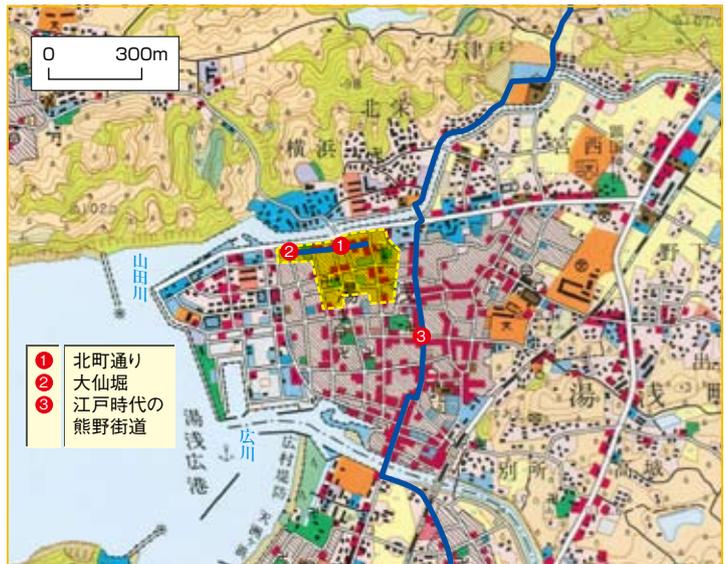
黒江の町並み（海南市）

*1 地図は、国土地理院2.5万分の1土地利用図「海南」（1979年）。

湯浅の町

湯浅の古い町並みは、北の山田川と南の広川にはさまれた河口部の低地にあります。

湯浅はわが国の古い醤油づくりの町として知られ、江戸時代には紀州藩の保護もあり多くの醸造家^{しょうぞうか}ができて醤油産業を中心とした商工業が発達しました。19世紀中ごろの調査によると、戸数が1,255戸、人口は5,546人を数え、幕末には城下町和歌山に次いで人口の多い町として栄えていました。また、湯浅は江戸時代には熊野街道の宿駅であり高野街道との分岐点でもありました。昭和の初めごろまでは汽船が出入りする紀伊水道の港町として、有田地方の交通や経済に重要な役割を果たしていました。その後、鉄道や自動車が交通の中心となるにつれ、その役割はうすれましたが、国や県の出先機関が置かれるなど、湯浅は今も有田地方における行政の中心地としての役割をもっています。



*1 湯浅の町

重要伝統的建造物群保存地区



湯浅の町並み（湯浅町）



山田川河口の大仙堀（湯浅町）

J R 紀勢本線の湯浅駅に降りると、せまい路地に昔ながらの家屋が建ち並んでいるのがわかります。南へ下り広川の河口に出ると、港に古い石垣が築かれていて、江戸時代には船着き場であった様子^{ようす}がうかがえます。北へ道町通り（熊野街道）を行くと、本町通りとの交差点に熊野街道の道標^{どうひょう}が立ち、道路に沿って古くからの商店や熊野詣ゆかりの寺があります。さらに、北町通りにかけては近世から近代の建物がよく残っていて、格子窓、虫籠窓のある^{むしごも}二階の家屋や、また漆喰壁や黒壁の家並み、分厚い壁の土蔵などがみられます。

また、1944年まで有田鉄道が敷かれていた山田川の河口には、醤油の積出港として造られた大仙堀と呼ばれる船だまりがあり、当時の面影をとどめています。そして、付近には江戸時代後期からの古い醸造元^{もと}があり、今も湯浅醤油の伝統を守り継いでいます。このように、湯浅には古くからの町並みに伝統産業が息づいています。

なお、旧市街地の北西部・北町・濱町・中町・鍛冶町の一部を囲む約6.3haは、2006（平成18）年12月に、県内で初めて国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。

*1 地図は、国土地理院2.5万分の1土地利用図「湯浅」（1979年）。
 *2 虫かごのような窓。
 *3 低い二階建ての建物。
 *4 歴史的な集落・町並みを国が認めて保存に指導・協力する地区をさす。

第3章 わかやまの自然と生活



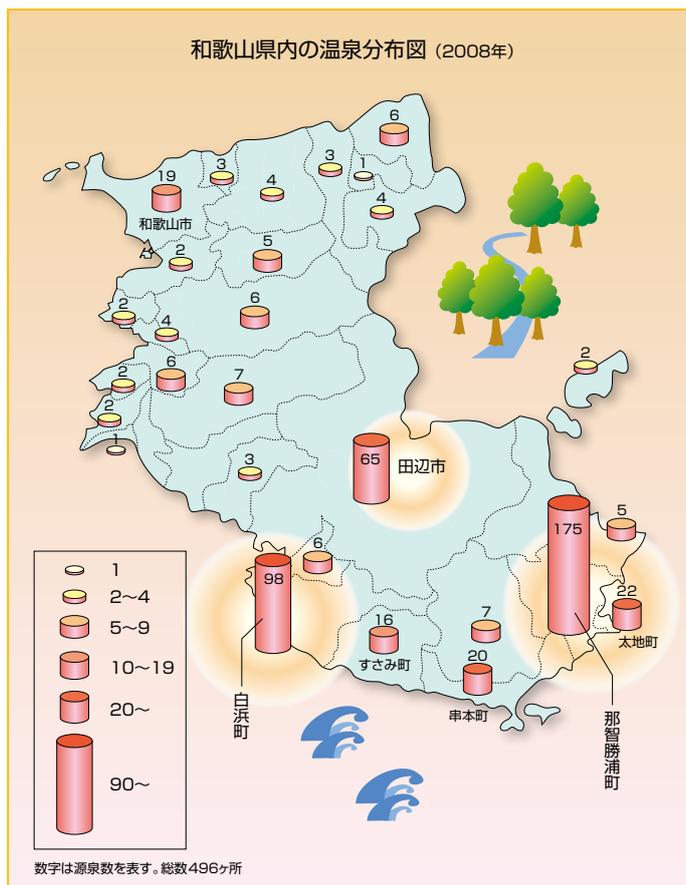
海と山の湯の町



和歌山県の温泉

和歌山県には温泉の数が496カ所（2008年調べ）とたくさんあります。県内30市町村のうち、御坊市と印南町以外の市町村に温泉がわいています。泉源が1つしかないところもあれば、那智勝浦町のように175もあるところもあってその分布はさまざまですが、紀南に多いのが特徴です。また、25℃以上の温泉は紀南に多いのに対し、紀北は25℃以下のところが多いのも特徴の1つです。温泉は生き物のように新しくわき出るところもあれば、かれて出なくなることもあります。また命の長い温泉も短い温泉もあります。

和歌山県には火山はありませんが、今から1,400万年前にできた火成岩が紀南に多く、その時の火山活動のなごりの熱が地下水を温めていると考えています。これが、勝浦・湯川・川湯・渡瀬・白浜・椿などの温泉になって現れていると考えられています。



白浜温泉の源泉のやぐらと白良浜ホテル群（白浜町）

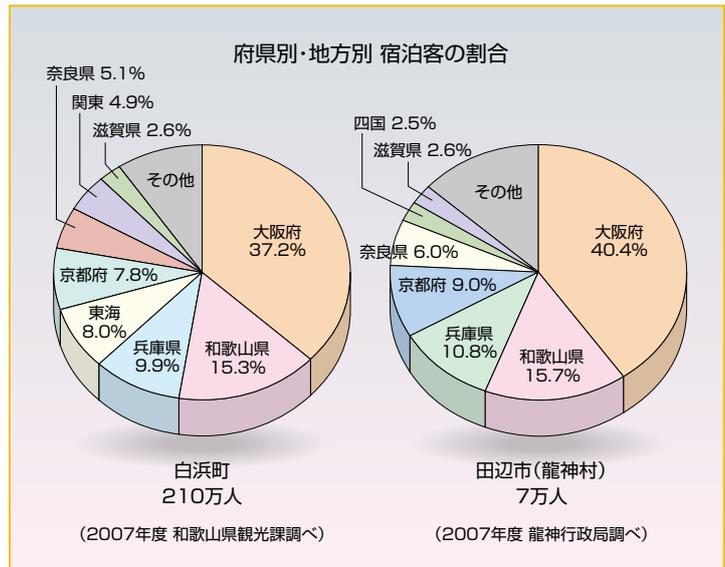
海の温泉 白浜

白浜の温泉は、奈良に都が移る前、^{さいめい} 齊明・^{じとうてん} 持統天皇などが訪れた古い歴史を持つ温泉ですが、その温泉とは「牟婁の湯」といわれた湯崎のことです。大正時代の終わりごろ白良浜近くで温泉を掘り当て、観光旅館が建ち並ぶようになりました。やがて日本三大古湯として知られていた湯崎温泉と1つになり、白浜温泉として急速に観光地へと発展しました。現在白浜には55本の泉源と9社の温泉会社があります。48℃～83℃の湯は、38軒のホテルや旅館、

*1 湯崎温泉は、「日本書紀」にある兵庫県の有馬温泉、愛媛県の道後温泉とともに「日本三大古湯」といわれている。

地元民家にパイプで配られています。

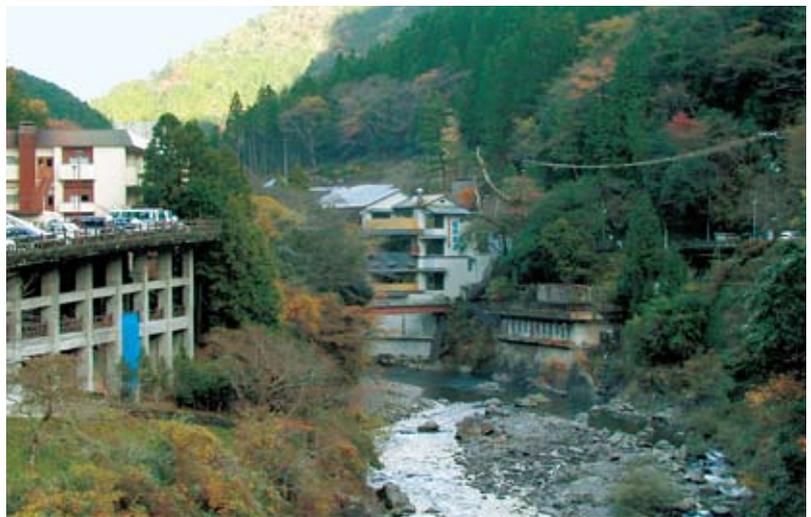
白浜温泉には、長さ620mの真っ白い砂浜が広がる白良浜や円月島・三段壁・千畳敷・平草原など景色に恵まれ、また大型のレジャー施設もたくさん建っています。1968（昭和43）年開港した南紀白浜空港は1996（平成8）年にジェット機の発着ができるようになり、東京からも速く快適に來られるようになりました。さらに、2007年に高速道路が田辺まで南進したため便利になって、全国各地から年間300万人が訪れ、内210万人が宿泊していますが、最近では外国からの観光客も増え、約3万人の宿泊客があります。



山の温泉 龍神

白浜が海岸部を代表する温泉なら、山間部を代表するのが龍神温泉です。

日高川の溪流ぞいにある龍神温泉は、役行者や弘法大師が掘り当てたという伝承があり、紀州初代藩主徳川頼宣も訪れたゆかりのある古い温泉です。おおぜいの湯治客が龍神街道を通過して訪れたので、江戸時代半ばには温泉宿が19軒もありましたが、今は6軒です。1955年ごろから、全国的な温泉ブームがおこり、「秘境」の温泉として龍神温泉が紹介され、有名になりました。1980年高野龍神スカイラインの開通、田辺と結ばれている虎ヶ峰越えの道路整備などが進み、訪れやすくなりました。宿泊客は年間約7万人で、観光客60万人のうちわずか11.7%に過ぎません。



龍神温泉 (田辺市龍神村)



徳川頼宣ゆかりの旅館 (田辺市龍神村)

この温泉は48℃のナトリウム・炭酸水素塩泉で、お湯につかれれば肌がすべすべになる効能があり「日本三大美人湯」の1つともいわれています。自然が豊かで、新緑の初夏、鮎釣りの夏、紅葉の秋が観光シーズンとなっています。

* 1 役小角ともいい、7～8世紀の山岳信仰の修験者のこと。

第3章 わかやまの自然と生活



寺院のあるまち



関連地域の位置

高野山の門前町

高野山は816（弘仁7）年、^{くうかい}空海によって^{しんごんしゅう}真言宗の寺院として開かれました。海拔800mの平らな高原で、山々に取り囲まれた盆地のような地形になっています。山には高野マキ・モミ・ツガなどの^{ろくぼく}高野六木といわれる^{しんようじゆ}針葉樹が茂り、寺の境内の樹木以外に、^{しげ}周辺の山でも^{けいだい}国有林として保護されています。



高野山の町並み（高野町）

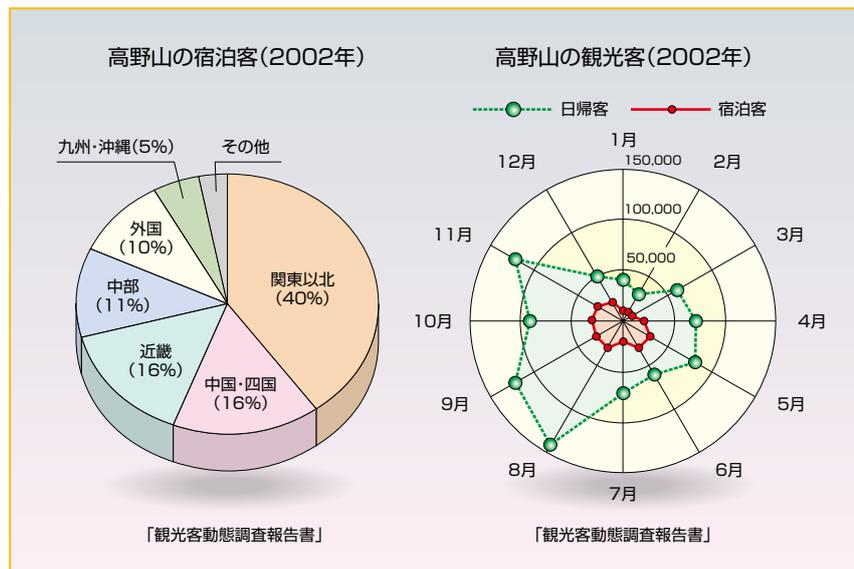
高野山は、^{こんごうぶじ}金剛峯寺や^{こんぽんだいとう}根本大塔を中心に^{さんない}山内には52寺の^{しゆくぼう}宿坊や^{けんぐ}仏具の店、高野マキの^{ろてん}露店がならび、高野の町らしい風景が見られます。すでに江戸時代中期には、^{えど}山上に商店が^{さんじょう}軒を^{のき}つらねていて、品物もたくさん売られていました。現在では、1,876軒^{にんご}4,632人の人々が主にサービス業に従事しています。

江戸時代から高野参りの人々は、^{かいどう}高野街道を^{にょにん}通って登りました。明治の中ごろから^{にょにん}女人禁制もなくなり、南海高野線が1929（昭和4）年に^{なんぽ}大阪府難波から^{ごくらくぼし}極楽橋まで通じ、翌年には^{にょにん}ケーブルカーができて、高野山上まで行けることになり^{さんばい}参拝客が増えました。1980年に開通した^{りゅうじん}高野龍神スカイライン（現在の国道371号線）によって、^{ごまだんざん}護摩壇山への観光も便利になりました。高野山の参拝客は、年間124万人ほどです

が、日帰り客が多く、夏から秋に集中します。夏の山上は特に涼しく、林間学校も開かれます。

2004（平成16）年、吉野・熊野とともに^{いざん}世界遺産に登録され、^{かんどう}関東以北や、また外国からの^{しゆくはく}宿泊客もふえました。

山上では水道水が不足するので、^{ありだかわ}有田川源流にポンプ場がつけられ、^{よご}有田川の汚れをなくす下水処理場もつくられました。



*1 第1編 第2章「わかやまの名をもつ植物」32ページ参照。
 *2 2005（平成17）年度、国勢調査による。
 *3 仏教における戒律で、それまでは高野山・比叡山などの寺で、女性が境内に入ることを禁じていた。

粉河の門前町

紀の川市 粉河は粉河寺の門前町です。JR和歌山線粉河駅から北へまっすぐにのびた参道が寺の大門まで続きます。

この門前町は、商業の町として室町時代には「粉河市」が開かれ、江戸時代には「伯市講」という商人の仲間ができて栄えました。粉河の産物としては、つり鐘などの鋳物や酢・酒・うちわなどが有名でした。今も参道には鋳物店が見られます。参道の両脇にあった古い町並みは、今では新しく広い道になって、そこに住む商店街の人々の生活は便利になりました。しかし、商店街では店を閉める

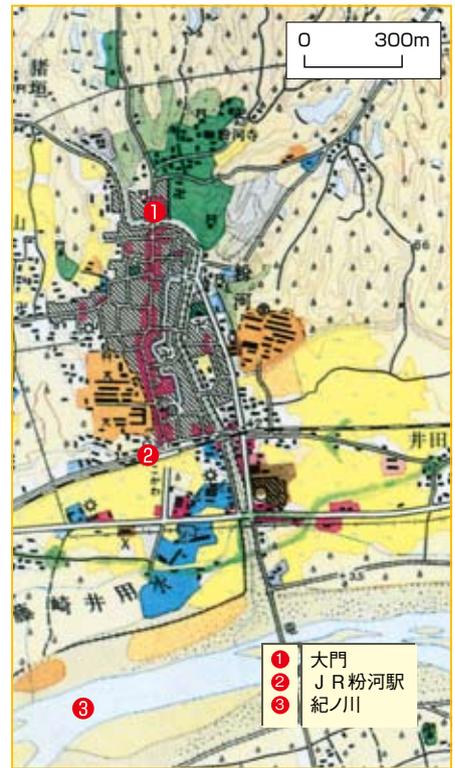
ところが目立ちはじめ、住民の新たな街づくりへの取り組みが始まっています。

粉河寺の参詣客は、ほとんどが日帰りですが、

大門前には旅館があります。毎年7月の末に行われる粉河祭は、地域ごとに山車がくりだされ、にぎわいます。



粉河の門前町（紀の川市）



*1 粉河の門前町

御坊の寺内町

御坊という地名は、日高御坊（西本願寺別院）を中心に発達したことによります。

入山の三宝寺の「日高御坊開基之覚」（写し）には、1595（文禄4）年に浅野氏の家臣佐竹源太夫によって、日高川河口の荒地四町四方に、御坊を中心とした町屋が建設されたと書かれています。御坊の古い地図には南北に東町・中町・西町が描かれています。また、日高川から分かれた下川が町のまわりを取り囲んでおり、町を外敵から守ることや水運に便利であったと考えられています。

寺院の前に旅館や土産物店が並ぶ門前町とちがって、御坊のような寺院を中心に計画して建設された町を寺内町といいます。

御坊の玄関口JR御坊駅は、町の中心から約2kmも離れており、その間を日本で一番短い私鉄線といわれてきた紀州鉄道によって結ばれています。御坊の古い市街地は、1996年にできた湯浅御坊道路と結ばれ、その道路沿いに官庁や学校・住宅団地ができてきました。



御坊と中町商店街（御坊市）

*1 地図は、国土地理院2.5万分の1土地利用図「粉河」（1977年）。

*2 開業は1928（昭和3）年に御坊臨港鉄道として町の有志によってつくり、2002年に芝山鉄道（千葉県）が日本一の短い鉄道（2.2km）となるまで、ミニ私鉄全国1位であった。現在は御坊～西御坊の5駅しかなく、総延長は南北に2.7km。

第3章 わかやまの自然と生活



昔の道と今の道



山越えの峠道と新しい道

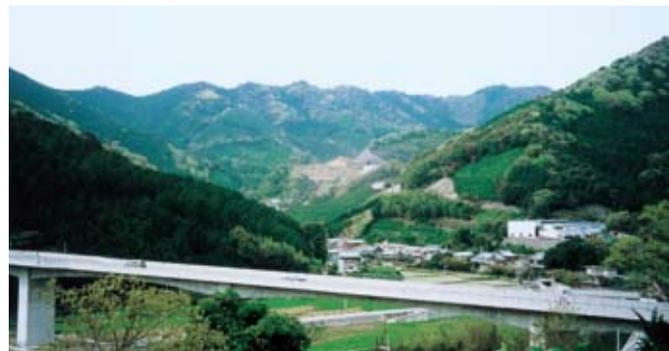
山深い紀伊山地の山なみを越える熊野古道や、紀見峠越えの高野街道を行くことは、昔の人々にとっては歩き疲れる山旅でした。しかし、今は新しい道路ができ、交通は大変便利になりました。

熊野三山へのいくつかの山越えの峠道の1つに鹿ヶ瀬峠があります。標高約350mの峠は湯浅から御坊へぬける古道で、『紀伊国名所図会』には峠の茶屋の風景がえがかれ、今でも日高町原谷に石畳の道が残り昔の名ごりをとどめています。

途中の河瀬や原谷には、熊野九十九王子の王子社がありました。また、馬留や杳掛という王子の名前は、けわしい峠のふもとをあらわしています。



鹿ヶ瀬峠の熊野古道の石畳（日高町）



鹿ヶ瀬峠の山並みと湯浅御坊道路（広川町）



鹿ヶ瀬峠（紀伊国名所図会）

途中の河瀬や原谷には、熊野九十九王子の王子社がありました。また、馬留や杳掛という王子の名前は、けわしい峠のふもとをあらわしています。1964（昭和39）年、峠の北側に国道42号の水越トンネルができ、さらに1996（平成8）年に湯浅御坊道路の鳥松山トンネルと川辺第一トンネルの完成で、山越えの道は大変便利になりました。

京都や大坂・堺から高野山への道は、紀見峠を越え、紀ノ川を渡り、九度山町の慈尊院（当時の高野政所）を経て、高野山の大門にいたりしました。このコースは中世から江戸時代初めごろまで利用された参詣道でした。

『紀伊国名所図会』には紀見峠にあった茶屋のにぎわっている様子がえがかれています。1915（大正4）年に高野鉄道が橋本まで開通し、1932年に県道が新設されてから峠の風景はがらりと変わりました。今はハイキングの人が通る静かな集落に

*1 第2編 第1章「熊野三山と参詣道」95ページ参照。
 *2 江戸時代の1811（文化8）年からつくられはじめた画と文で名所などを書いたもの。
 *3 高野山の寺領を管理する役所。

なっています。1857(安政4)年の「高野山女人堂江六里」と刻まれた道しるべが建ち、峠の細長い道すじには、かつて旅人を泊めたと伝わる家をはじめ十数軒の家が残っています。峠から古い道を下ると杳掛の集落です。ここでわらじを取りかえたところから杳掛という地名が、ついたとも言われています。江戸時代には、峠を越えるため20頭ほどの馬がいて利用されていたようです。現在は峠まで今もバスが通っていますが、住民のほとんどは自家用車を利用しています。また、1969年に紀見トンネルが開通し、国道371号は、南海高野線とともに大阪府へ通じる重要な交通路となり、今も新しい道路の建設工事がすすめられています。



紀見峠「紀伊国名所図会」

紀伊山地の交通路

紀伊山地は東西方向に山脈がつづいています。川の流れも紀ノ川や有田川・日高川・富田川など、ほぼ東から西へと流れて紀伊水道にそそいでいます。そのため、紀伊山地の村々を結んでいるバス路線は、中には谷から谷へと峠を越えるところもありますが、海岸を走るJR紀勢本線の主な駅から上流の土地まで、川沿いに通っているところがほとんどです。



紀見峠の国道371号(橋本市)

今は、交通の中心はバスよりも自家用車やトラックになってきています。バスの運行本数は、1日5往復以下が多く、さらに乗客の少ない町村では会社に補助金を出してバスを運行している路線もあります。

山村には、立派な道路がつき、トンネルが開通して、紀伊山地の交通もたいへん便利になってきていますが、現在、乗用車やトラックなどの貨物車が紀伊山地をどれだけ走っているかを見ると、昼間1日に1万台以上の交通量がある国道は、橋本から田辺までと勝浦から新宮を結ぶ路線で、山間部では、1,000台以下と少なくなっています。

しかし、これらの道沿いには、「道の駅」が、県内には18か所(2008年)設けられています。ここは自動車の運転者などの休憩所であるだけでなく、その土地の特産品を売っており、地域の発展に役立っています。



* 1 1993(平成5)年から、長距離を走る車の運転者などが休憩するために建設省(現在の国土交通省)によって設けられた。
* 2 平日昼間(12時間)国道のみ(和歌山県県土整備部資料より作成)。